幼児の自然教育について

太田次郎

本誌二月号に、文部省編の幼稚園教育指導書「自然編」の批判を述べ、そのむすびとして批判を批判のみで終らせたくないと記しておいた。その責任であろうか、編集部より幼児の自然教育についての筆者の考えを述べるよう要請された。筆者は幼児教育の専門家ではないし、わが子とその友達を除けば、幼児の姿に接することはほとんどない。したがって、筆者の考えは、専門の方々からみれば、無謀であったり、不当であったり、あるいはすでに検討ずみのものであるかもしれない。しかし、上記の責任もあるので、以下に思い切って、二、三の提案や日ごろ考えていることを記してみる。もし、これが多くの人々の批判の種となり、幼児の自然教育をどうしたら良いかについて考える上の材料の一つともなれば幸である。

「幼児の教育の基本をなすもの」

幼児の教育の基本をなすものが何であるかについて、多くの考えがあるであろう。そのいちいちについて筆者は知識を有していない。しかし、いずれにしても、それは幼児の活動や生活を基礎として成り立っているものと思う。「あたりまえじゃないか」といわれるに違いない。でもあたりまえと片づけられないところに問題がある。先の文部省の指導書を読んだときも、筆者にとってどうもあたりまえのことと思えないから批判したのである。何をそう感じたかは、二、三の例をあげておいたので、ここで繰り返して述べないが、要は幼児がこれを見たり、これをいじったりしたとき、どうするか、どう考えるかについてよりも、何を教えるかが、指導書の基本になっているように思えることである。

では、筆者はどう考えるか。日頃わが子をみている経験から、賛同の意を表したいのは、本誌の昨年十二月号に発表された、津守氏の「遊びを中心とする保育について」の考えである。その中で、「幼児の保育の中心は遊びである。幼稚園や保育園ではもっと子どもが

遊ぶ時間をじゅうぶんにとる必要がある。与えるプログラムがあまりたてこんでは子どもが遊ぶひまがなくなる……。保育者は子どもの遊びを発展させるために準備をする必要がある……」と記されている。まさにこのとおりと思う。したがって、幼児の自然教育を考える場合にも、もりだくさんなプログラムや、なまはんかの科学的知識を与えようと考えないで、幼児が遊び、活動する間に、自分で観察し、工夫し、考える能力を養うように指導するよう心がけることが必要に思う。このような観点に立つと、従来「自然に親しめ」とか「子どもが好む」とかばく然と幼児教育に良いと考えられていた教材や指導方法の中にも、改めて考え直さねばならぬものが多いのではなかろうか。むしろ、幼児の活動を観察し記録したことをもとに、新しい教材や指導法も考えられると思う。次に、このような考えをもとに、しろうとの立場からみた、二、三の提案をしてみたい。

「幼児の活動をもとに考えた自然の指導」

幼児期で養わねばならぬもっとも大切なことは、自分の目で見、自分の手でいじり、自分の頭で考える（もちろん友達と相談し、協力できればなお良い）能力であると思う。この能力さえ与えられれば、将来の自然科学を学ぶ基礎としてじゅうぶんあると思う。したがって、自然とか社会とか分けて知識を与えなくて、幼児の遊びを発展させる形で指導する方が良いように思われる。

具体的な例として、観察と製作活動をあげてみたい。第一の観察であるが、多くの幼稚園には、美しく整備された花だんがあり、四季おりおりの花が咲いている。今、この花だんの花を外から観察し、先生が、これが花びら、これが雄しべ、これが雌しべと話したところで、多くの子ども達は、花のつくりを自分のものとして理解しないであろう。むしろ、自分の手でさわり、花の中を開いてみた場合、手についた粉で花粉を知らせる方がずっとわかり良いと思う。もちろん、この場合むやみと花をちぎってしまうことは、動植物の愛護ということとむじゅんしてしまう。そこで、花だんをできれば二つ作り、一つの方は、幼児に思う存分いじらせ、さぐらせ、他の一つは、決していじらない約束をしてみたらどうであろうか。このような場合、もちろんいたずらに何をしても良いと放任しておけというわけではないが、先生の注意は最低限にしておきたい。子どもは花びらをちぎり、葉をむしりとるかもしれない。しかし、それによって、植物によっては、たてにさけやすい葉もあれば、そうでない葉もあることを知るだろう。また、根にひき抜きやすいものもあれば、すぐち切れてしまうものもあることがわかるであろう。このようなことを、動植物を愛護し、育てるという精神から、ただ見せただけで指導できるであろうか。このことは、子どものふすまへの落書きについて、ある人が子ども部屋のふすまは自由に子ども達へ開放し、一方お座敷のふすまへ落書きしないようにしつけて成功した例をもとに思いついたものである。

次の例として、製作活動を考えてみたい。自然と製作活動とは違

うではないかと考える人があるかもしれないが、自然科学の基礎として、物を工夫しながら作ることは重要である。ただ、物を作るといっても、美しい完成品を飾ることではない。むしろ、でき上った物より、それを作りあげる過程の方が大事である。したがって完成品を分解したり、さらに複雑なものへ再構成していくことも必要である。このような点で、古くから使われている、つみ木や砂場はたしかにすぐれている。しかし、現在のつみ木では家や船の形だけの模ほうはできても、機能的な面がほとんど作れない。俗にとんとんつみ木などという棒や丸板や、穴のあいた板で構成されたつみ木もあるが、これらもまだまだじゅうぶんでない。現在の科学の発達からみると、プラスチック、電池永久磁石など新しいいろいろな材料がある。これらを使えば、子どもの欲求を今のつみ木よりずっと満足させる教材が作れるように思う。また、まわるとか動くとかの機能をもったおもちゃで、子どもの手で危険を伴わずに分解し、再構成できるものはないだろうか。こんなおもちゃが考案されたら、それこそ実に良い教材となるであろう。果してこれらは大へんむずかしいであろうか。いや、皆が手製のものを工夫して作れば、それほどとは思われない。わが子に与えるべきおもちゃの貧しさを痛感しているのは、筆者のみではないと思う。

このほか、乱暴かもしれない思いつきはいろいろある。雨や雪を知らせるには、測候所の下請け仕事みたいに天気の日記図を作らせるのは意味がない。子どもの頭からかぶる簡単なレインコートのようなものを着せて、雨や雪の中で遊ばせてみたらどうであろうか。

以上の例は、みなすでに行なわれているかもしれない。しかし、いずれもわが子の経験では、幼稚園のやり方とあっていないようである。しかし、子どもはきっと喜んで、活動し、そこから何物かが得られるように思う。

むすび

遊びを中心にした保育や、幼児の活動をもとに考えた教育といえば、一部の人から戦後の理科教育の失敗を指摘されるかもしれない。なるほど、戦後の小・中学校の理科教育、生活に即したとうたわれた直輸入教育の欠陥は各所であらわれている。しかし、あの場合は、中学生に基礎を与えずに、「良い家の作り方」とか「着物の洗たくのし方」などということを教えたからである。したがって、中性とかアルカリ性とかがわからないのに、中性洗剤を持ち出すような教え方であった。つまり、戦後の理科は、やはり雑多な中途半ぱの知識のつめ込みであった。このことが反省され、理科教育の体系化が唱えられるのは良いことであるが、一面逆になり過ぎれば、ふたたび子どもの活動を抑え、子どもの発達を無視したつめ込み教育になってしまう。幼児の自然教育でも同様であって、決して知識を教えることをあせらず、古いことばではあるが子どもの心身をすくすくのばしていくことが第一であると思う。

（お茶の水女子大学）